

メジャースポーツとマイナースポーツの共存共栄策
 - ロンドン五輪とビーチバレーを切り口に -

産業能率大学 小野田ゼミ A

○楠見 昂世 石田 アンジェラ 内野 駿祐

1. 背景と目的

私達が所属するゼミでは、スポーツに関する1万人を対象にしたインターネット調査を定期的実施しており、その一つに「子供にやってほしいスポーツ」調査がある(小野田・川合 2012 など)。その結果は国際大会における競技での成績が、親世代の心理に多大な影響を及ぼすことを証明している。

たとえば昨年(2011年)の2月と9月、すなわち FIFA 女子ワールドカップ(W杯)におけるサッカー女子日本代表「なでしこジャパン」の優勝の前後比較がその典型例である。「娘にサッカーをさせたい」と回答した父親世代の比率が、W杯前では14位の5.4%に留まったのに対し、W杯後には4位の12.1%へと一気に跳ね上がったからである。

同様の調査を本年のロンドン五輪前後においても実施した。表1は五輪前後を比較した際の上昇率の上位10件である。「柔道」や「ソフトボール」に関しては、今回初めて金メダルなしに終わった男子柔道の復活と、前回北京大会で金メダルを獲得した女子ソフトボールの五輪種目復帰に賭ける期待感が読み取れるが、それ以外の上位種目はすべて今大会においてメダルを獲得した競技という共通点がある。なかでも興味深いのが子供の性別を問わず上位にランクインしている「アーチェリー」と「フェンシング」の存在である。

女子サッカーがこれまで、男子サッカーに比べて環境的に恵まれなかったことは多くの報道や文献が指摘するところであるが、サッカー自体は1996年に提唱された『Jリーグ百年構想- スポーツで、もっと、幸せな国へ。』のもと裾野を広げ、我が国のスポーツ文化の一つとして着実に根付いてきており、それが今回のなでしこフィーバーを後押ししたことも事実である。また多くの子供たちが経験する機会が多い水泳や卓球に対しても同様の指摘ができるだろう。その意味で、現状ではメジャースポーツとは言い難い「アーチェリー」や「フェンシング」に対して、ロンドン五輪を機に、子供にさせたい意向が親世代で少なからず高まったという結果は興味深い。本研究の目的は、このようなメジャースポーツとマイナ

【表1】「子供にやってほしい」のスポーツの上昇率上位10件(2012 ロンドン五輪の前後比較)

息子にやってほしいスポーツ		
順位	競技名	%
1	柔道	+ 2.6
2	水泳・スイミング	+ 1.8
3	卓球	+ 1.7
4	体操競技	+ 1.4
5	アーチェリー	+ 1.2
	フェンシング	+ 1.2
7	バレーボール	+ 1.1
8	レスリング	+ 1.0
9	陸上 (フィールド)	+ 0.7
10	射撃	+ 0.5

娘にやってほしいスポーツ		
順位	競技名	%
1	サッカー	+ 3.8
2	ソフトボール	+ 2.4
	卓球	+ 2.4
4	アーチェリー	+ 2.3
5	バレーボール	+ 1.9
6	バドミントン	+ 1.5
7	レスリング	+ 0.8
8	フェンシング	+ 0.7
9	水泳・スイミング	+ 0.6
	新体操	+ 0.6

一スポーツ間に潜む問題や可能性について調査を実施し、その結果の考察を通じて、今日の、そしてこれからの日本に必要なとされるスポーツ政策を導き出すことにある。

2. 研究方法

上記目的達成のために、私達は現状を把握するための3つの調査を実施することにした。

一つ目の調査は、インターネットを利用した定量調査であり、全国の20代から60代までの男女1万人を対象に「学生時代の部活動経験と大会での成績」について尋ねた。この調査の目的は競技人口と上位大会の出場率のミスマッチ構造を明らかにすることである。

二つ目の調査は、ロンドン五輪日本代表選手のスポーツ経歴調査である。293人(フェンシングにおける選手交代を含めると295人)全員の細かい履歴を得ることは難しいが、JOC公式サイトのほか選手ブログ等にも当たり、信憑性の高いデータ作成に努めた。この調査の目的は、スポーツを志す人々の模範であり憧れの対象であるオリンピック選手が、幼い頃から同じ種目に打ち込んできたのか、あるいは転向を経たのかの事例蓄積である。

そして三つ目の調査は、スポーツ競技者へのインタビューによる定性調査である。幸い本チームに所属する石田アンジェラは女子ビーチバレーのユニバーシアード日本代表である。よって自らの経験や意識変化を、上記調査結果と合わせて記述し参考としたい。

3. 現状把握

3.1 競技人口と上位大会の出場率のミスマッチ構造

第一の調査「学生時代の部活動経験と大会での成績」は、今年6月に93種目とその他の自由記述欄を設けて実施した。大会での成績は9段階用意し「特に優れた成績を残していない」から始まり、レギュラーだったのか、地区大会、都道府県大会、全国大会、どのレベルの大会で何位だったのか等を尋ねた。表2は選択肢を4段階に縮約した上での「学生時代の部活動経験者数」および「全国大会以上の出場率」の上位10件ずつである。

【表2】「学生時代の部活動経験者数」(左)と「全国大会以上の出場率」(右)の上位10件

順位	競技名	部活動経験者	優れた成績なし	地区大会上位入賞	都道府県大会出場	全国大会出場	順位	競技名	部活動経験者	優れた成績なし	地区大会上位入賞	都道府県大会出場	全国大会出場
		N	%	%	%	%			N	%	%	%	%
1	軟式野球	1,786	72.9	18.2	7.6	1.4	1	リュージュ	6	16.7	16.7	0.0	66.6
2	卓球	1,633	83.3	9.4	6.0	1.2	2	ボブスレー	7	28.6	14.3	0.0	57.2
3	バレーボール	1,599	78.2	11.8	8.0	2.0	3	フェンシング	24	25.0	12.5	12.5	50.0
4	ソフトボール	1,580	74.8	17.9	5.7	1.8	4	シクロナイズドスイング	13	46.2	7.7	0.0	46.2
5	バスケットボール	1,537	78.8	10.9	8.1	2.3	5	なぎなた	20	50.0	15.0	5.0	30.0
6	硬式テニス	1,420	85.8	7.3	5.4	1.5	6	テコンドー	14	57.1	7.1	7.1	28.5
7	軟式テニス	1,418	74.4	11.7	12.0	2.0	7	ラクロス	15	53.4	6.7	13.3	26.7
8	水泳(競泳)	1,387	74.8	15.3	8.0	2.0		ホッケー	30	49.9	16.7	6.7	26.7
9	サッカー	1,370	74.2	12.3	10.7	3.0	9	カーリング	15	46.7	13.3	13.3	26.6
10	陸上競技	1,191	60.1	18.7	17.9	3.3	10	競技ダンス	34	47.0	17.6	8.8	26.4

無論、スポーツの目的は勝つ事だけでなく、部員の多い部活動を通じて友人を増やし、協調性を養う等の目的もある。また、たとえ全国大会に出場できる確率の高い競技だとしても、近くに施設がない、用具が高価で購入できない等の問題点も指摘できよう。しかし

ながら少なくとも、数値的にはメジャースポーツにおける全国大会出場は極めて難しい反面、マイナースポーツでは比較的その可能性が高いことは確かである。その偏りを是正することは、才能の埋没を防ぎ、特に当該競技がオリンピック種目である場合には、メダル獲得が期待できるタレントを発掘することにも通じよう。

3.2 メダリストたちに見る転向の成功例

次に、第二の「ロンドン五輪日本代表選手のスポーツ経歴調査」の報告である。この調査結果は、特徴的な転向の成功事例として、表3の3人のメダリストたちを取り上げたい。

【表3】競技転向がロンドン五輪でのメダル獲得に繋がった選手の例

事例番号	選手名 (出場種目・結果)	転向にまつわるエピソード
1	杉本美香 選手 (柔道女子78kg超級・銀メダル)	小学校5年生までは水泳やテニスを行っていたが、自宅近くの道場で柔道に目覚める。「女の子がするもんちやう、あかん」と猛反対した父親をひたすら説得して始め、才能を開花させる。
2	千田健太 選手 (フェンシング男子フルール団体・銀メダル)	小学校まではサッカーをやっていたが中学からはフェンシングに専念。元日本代表の父親・健一氏(ただし五輪は1980モスクワ大会ボイコットにより未出場)から特訓を受け才能を伸ばす。
3	川中香緒里 選手 (アーチェリー女子団体・銅メダル)	小学校はバレーボール部、中学校はソフトテニス部だった。高校からは珍しい競技がしたいとの理由でアーチェリーを始めたところ新人戦でいきなり優勝。天職を得たかのごとく頭角を現す。

これらの事例だけを見ても、子供の競技選択に親の意向が否応なしに関わっていること、「らしさの壁」とも言うべき社会的障壁が特にジェンダー面で根強いこと、そして自らに適した競技との運命的な出会いがメダル獲得への第一歩となったことなどが窺い知れる。

3.3 ユニバーシアード日本代表としての経験談 (女子ビーチバレー・石田アンジェラ)

石田：中学校からインドアのバレーボールを始めて、高校卒業まで6年間やってきたが大学ではスポーツ自体を続ける気がなかった。そんな時に産能大の川合庶ヘッドコーチから「ビーチバレーをやってみないか」という誘いを受けてしぶしぶ見学に行った。先入観からインドアに比べて迫力不足に感じ、その時点では転向の意欲は湧かなかった。しかし「オリンピックも夢ではない」「特待生として迎え入れる」と説得され決心が固まった。

石田：でも今思えば、本当にビーチバレーを始めて良かった。大学選手権で優勝したり、ユニバーシアード日本代表としてブラジルに遠征させていただいたり。現在では2016年のリオ五輪出場という明確な目標を持って練習にも打ち込んでいる。先入観を取り払えばビーチバレーは自由でとても楽しく、自分の新たな可能性に気づくことができた。インドアにない魅力としては風と砂。天候を味方につけた方が勝敗を制する、経験がものをいう競技だ。私はビーチバレー選手になれたことに大変満足しているが、同様に日本代表として期待をかけてもらえる可能性のある選手は他の種目にもきっとたくさん埋もれていると思う。もし可能性を潰してしまっているとしたら、そのような状況は本人にとっても不幸だし、オリンピック種目の強化という国の視点から見ても勿体ないことだと感じる。

4. 政策提言

以上の異なる3つの調査結果を総合し、次の2つを私達の政策として提言する。

4.1 身体計測・体力テストのデータを活かした適合種目の推奨システム

一つ目の政策提言は、全国の小学校・中学校・高校で毎年実施される身体測定と、多くの児童・生徒が受ける体力テストを、スポーツ科学的なデータ分析と組み合わせ、本人の体格や特性に適した種目を推奨する仕組みを構築するという施策である。それはたとえば、反復横とびの成績が良く、動体視力に優れた児童に卓球を勧めるといったものだ。勿論その際に個人情報保護は保たなければならないし、権力的な種目の強制は避けるべきである。だが、現在行っているスポーツがまるで本人に向いておらず、もっと才能を発揮できる別種目があるのにその存在が知らされないとしたら、その現状の方がむしろ問題である。当該政策を部分的に採用しているオーストラリア(勝田ほか2005)やカナダ(荒井2011)などの先行事例も参考に、本人の意思によって適したスポーツを選択できる環境を築いてほしい。

4.2 学校間のネットワークを活かした部活や体育の多様化

しかし、どの学校にも同じような部活動しかなく、体育の内容も画一的だとしたら、上記の政策は機能しない。そこで二つ目の政策として提言したいのが、部活や体育に多様な種目を用意して実際に触れる機会を増やし、それを通じて自分に最もフィットする種目が何であるのかを自覚してもらう施策である。一つ目の政策との相乗効果によって「らしさの壁」の解消も期待できる。ただし少子高齢化の昨今、一つの学校でそれを実現することは不可能である。したがって近隣地域の学校やスポーツクラブ同士が連携することが不可欠である。用具を学校間で融通し合うことができれば体育の授業で多くの種目を実施できるはずであるし、他校が活動場所の部活動にも入部できるようにすれば部員不足の問題も解消でき、地方自治体などはその地域に根差した競技の強化なども可能となる。

以上は法的にも資金的にも国の支援が不可欠な政策ではある。しかしながら多くの国民が健康な身体でスポーツを満喫する環境づくりだけでなく、将来的なメダル候補のタレントが育つ環境づくりにも繋がる優れた政策だと確信し、ここに提案するものである。

<資料・文献>

第30回オリンピック競技大会(2012/ロンドン)日本代表選手団、公益財団法人日本オリンピック委員会、<http://www.joc.or.jp/games/olympic/london/japan/>

オリンピック選手の親たち、スーパーニュースアンカー、2012年7月20日放送、関西テレビ、http://www.ktv.co.jp/anchor/today/2012_07_20.html

荒井宏和(2011) インテリジェンスに基づくカナダのメダル獲得戦略計画の成果と評価、流通経済大学スポーツ健康科学部紀要、Vol. 4、pp. 3-12

勝田隆ほか(2005) タレント発掘プログラムの必要性と可能性 -種目転向プログラムの構築に関する基礎調査、仙台大学紀要、Vol. 36、No. 2、pp. 50-58

小野田哲弥・川合庶(2012) メディア影響調査で探るビーチバレーの可能性 -なでしこチームとスポーツ漫画の影響を中心に-、SANN0 SPORTS MANEGEMENT、Vol. 04、pp. 17-18